

不安に立つ

第16回

このコーナーは宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌名古屋教区教化運動方針「不安に立つ」をテーマに、宗門内外の方から寄稿いただいています。

闇の中に光を見いだす



清水 康之

(しみず やすゆき)

NPO法人自殺対策支援センター
ライフリンク代表

「闇が深ければ深いほど、小さな光が明るく見える」。三十五歳で聴覚を失った作曲家、佐村河内守さん(四十六歳)の言葉である。人は欲深く、光の中にいながらも、より強い光を求めてしまう。でも本当に大切なものは闇の中で小さく輝いているのであって、闇が深い時ほどそれを見つけてチャンスだ、というのである。ご自身の壮絶な体験の中から紡ぎだされた言葉だけあって、さすがに重みが違う。

私たちの暮らす日本社会も、いまは深い暗闇の中にあると言わなければならない。振り返れば日本社会は戦後、右肩上がりの経済成長を続け、八〇年代後半にはバブル期に突入した。求める限りの光を浴びて、まるで闇の存在を予感することのない圧倒的なまばゆさを経験してきた。

ところが、九〇年代後半にバブルがはじけ、あつという間に暗闇に包まれた。その象徴が「年間自殺者三万人」である。九七年までは二万人台の前半で推移していた年間自殺者数が、九八年を境に年間ベースで一挙に八〇〇人以上も激増して三万人を突破。今日に至るまで十二年間も高止まりを続けているのだ。

この暗闇を「チャンス」と呼ぶには、あまりにも犠牲となったものが大きかったわけ、この重大さを前にして絶句し、思わず目を瞑ってしまいたくなるのも無理はない。しかし、いま私たちの社会が大きな分岐点に立っていることは、自覚しなければならぬ。再び一心不乱に強い光ばかりを求めて進むのか、それとも闇の中でじつと目を凝らし、そこに宿っている小さな光を見いだそうとするのか――。

私は景気回復の重要性を軽んじるつもりはない。ただそれが目的化してはならない

と思う。私たちの「いのち」や「幸福感」が優先すべきものとしてまずあって、それを得るための手段として景気回復が位置づけられるようにすること。そうでなければ、いのちが経済に翻弄され続けるといふ日本社会の体質は変わらず、景気が悪化するたびに自殺に追い込まれる人が今後も増え続けることになるだろう。(景気の善し悪しと自殺率との間に、日本ほど相関関係の強い国はない。)

何のための景気回復なのか。景気を回復させて、その先に何を現実させるのか。私たちはいま、勇気をもって闇の中でじつと目を凝らし、そこに、小さくとも確かな光を見いださなければならぬ。自殺の問題と真摯に向き合ったその先にこそ、「いのち」を輝かせるためのヒントが隠されているのだと、私は信じている。

*次号からは齋藤子(コノシヤ)さんにご執筆いただきます。